

〔特産熱帯果樹等の安定生産技術の開発〕
小笠原の気候を活かした新作目の生育・果実特性の把握
～アテモヤの果実肥大状況の把握～
河野 章・宗 芳光
(小笠原亜熱帯農業センター)

【要 約】「ピンクスマンモス」は人工受粉後約 50 日の間に肥大が急速に進み、収穫果の約 70%の大きさにまで肥大する。その後肥大は鈍化するが収穫約 30 日前から再び肥大が進み、その後、果実の大きさが約 17%増加する。

【目 的】

アテモヤは食味が良好で耐暑性が高いことから小笠原における新たな熱帯果樹として期待されている。日本国内では三重県などで生産出荷が行われるようになってきたが、小笠原においては栽培事例が少なく、導入するうえでの基礎的データが不足している。そこで、「ピンクスマンモス」について人工受粉後の果実の肥大状況を把握し、導入に向けての基礎資料とする。

【方 法】

2006 年 2 月に定植した 2 年生 9 樹について、2007 年 5 月 9 日から 6 月 29 日まで週 3 回 16:00～17:00 の間に人工受粉を行った。受粉後約 2 週間経過した、大きさが 2 cm 程に正常肥大したもののうち、競合する果実が他にないものを 12 果選定し、1 週間ごとに果高および果径を測定した。期間中、適宜徒長した枝の剪定を行い、施肥は 5, 7, 11 月にそれぞれ成分量で N-P₂O₅-K₂O を 4.8-1.2-6.0kg/10a 行った。収穫は果頂部の果皮色が緑色から薄緑色に変化した時点で行った。

【成果の概要】

- 1) 果高、果径ともに受粉後約 50 日までの間に肥大が急速に進み、その後、肥大は鈍化した(図 1)。
- 2) 果高、果径ともに受粉後約 50 日目以降停滞していた果実の肥大が収穫の約 30 日前から再び活発になり、収穫直前まで続いた(図 2)。
- 3) 受粉後約 50 日における果実の大きさは果高 7.6cm、果径 6.8cm であり、収穫時に対する割合はそれぞれ 71.6%、70.5%であった。また、収穫約 30 日前の果実の大きさは果高 9.1cm、果径 8.2cm であり、収穫時に対する割合はそれぞれ 85.8%、85.2%であった(表 1)。
- 4) 以上のことから、「ピンクスマンモス」は人工受粉後約 50 日の間に肥大が急速に進み収穫果の約 70%の大きさにまで肥大する。その後肥大は鈍化するが、収穫約 30 日前から再び肥大が進み、1 ヶ月の間に果実の大きさが約 17%増加することがわかった。今後は、より大きな果実を生産するため、果実の肥大を促進するための処理方法の検討や、人工授粉の時期の違いによる果実の肥大状況の把握を行っていく。

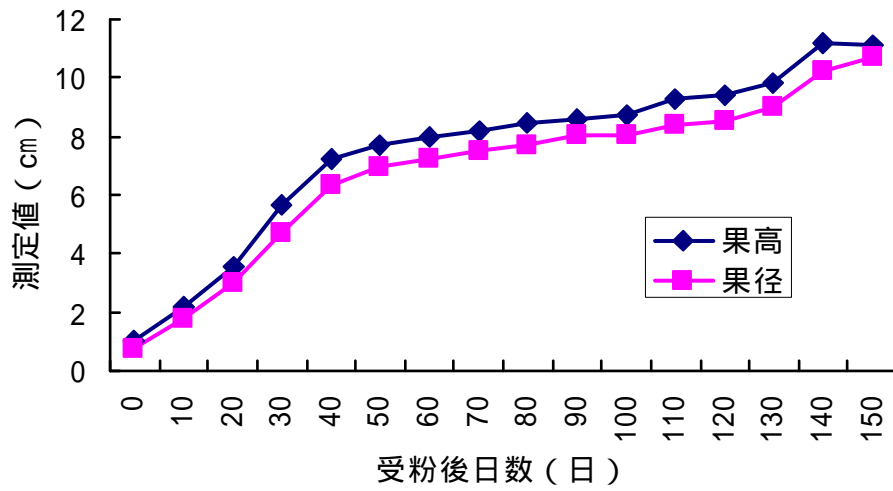


図1 人工受粉後の果実の肥大状況 (12果平均)

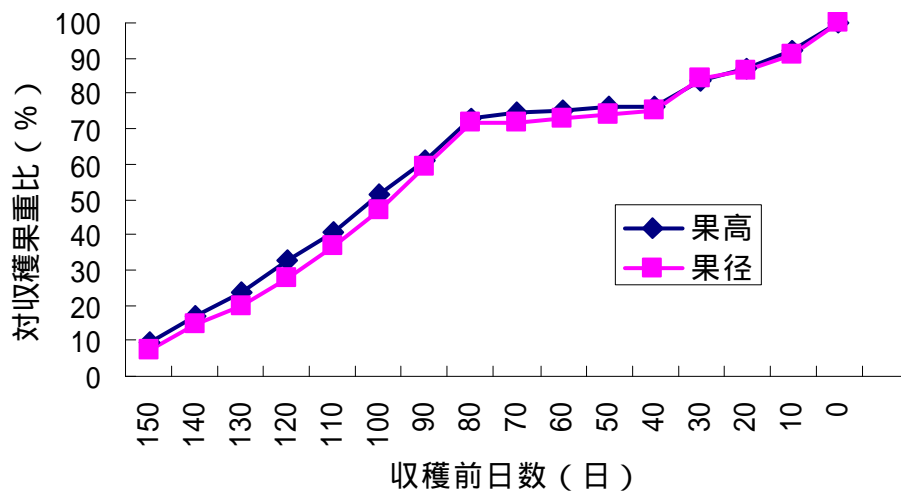


図2 収穫果重を100とした場合の果実の肥大状況 (12果平均)

表1 時期別の果実肥大状況 (12果平均)

	果高 (cm)	対収穫果 (%)	果径 (cm)	対収穫果 (%)
受粉後約50日	7.6	71.6	6.8	70.5
収穫前約30日	9.1	85.8	8.2	85.2
収穫時	10.6	100	9.7	100